丑物語

カマボコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
丑物語

【Ｎコード】
Ｎ７６２４Ｚ

【作者名】
カマボコ

【あらすじ】
その男は被害者ではなく、加害者だった。　楠元約士はヒネくれ者で、変わり者だった。そんな彼のウシなわれた物語。

無邪気な狂気

小学生の頃、友人を庇い、放課後まで怒鳴られた。　当の本人は知らんぷり。何処かでそんな本読んだな、と上の空で先生の言葉なんて頭に入らなかった。一日一善。しかも特大なやつだ。きっと神様がお返しするだろう、晩御飯に好きな食べ物が入るとか、そんなはっぴーな話が、と相変わらず馬鹿みたいなお気楽人生を満喫していた。

この日、友人を庇わなければ俺は非現実的な科学的根拠もない『アレ』に取り憑かれる事はなかっただろう。　まぁ、後悔はしていないし、刺激的な生活のお蔭で飽きない日々が送れるのだ。寧ろ、感謝してると言った方が……　流石にそこまで褒めると『アレ』が調子に乗るのでストップ。加減出来ないのが悪い所だと親友にもよく言われる。いい所は？　と聞き返して見ると四五十分語られた。一応、表記した通り、友人と親友は別人だ。友人は少し子供っぽい所がある一般人。親友は学校一とも言えるであろう人気者。前者が男で後者が女。　前者は知らんぷりした薄情者だ。後者は今から語ろうと思う。その頃の親友は人気者でもなく、転校生だった為か、孤立していた。あの時の自分はどうして彼女に話し掛けたのだろうか、今の自分が思うに、『努力家な彼女が美しく見えたのだろう』　そんな努力家になりたかった。口だけだけど。

◆◇◆◇◆◇◆

あの日の俺は急いでいた。無駄に大きな時計を確認する。現在、六時二十分。春だからまだ夕日が眩しい。先生にも早く帰れと怒鳴られたし、走って帰ろう。　……でもどうしてあの子は走ってるん

だろう。　俺が見たのはグラウンドのレーンを駆けていた。いや、歩いてるのと同じぐらいの速度だから駆けているはおかしい。進んでいるでいいか。万能だな進んでいる。　とかどんどん話の方向がずれそうになってきている。　兎に角、その少女に何故走っているのか訊きたくなった。何か不思議と思えるようなものがあったのだろう。そんな適当な理由を付けて、その努力を間近で見たかったのだろう。彼女には何かを引き付けるものがあった。子供であった自分でさえも引きつける何か、でも、その何かは俺以外引き付けなかったようで、周りの人は見向きもせずに通り過ぎていくのだった。その時、彼女は限界がきたらしく、立ち止まってしまった。今なら理由が訊けるんじゃないかと思い、小走りで彼女に近づいた。

「ねえねえ！　どうして走ってるの？　こう、秘密の特訓的な？」

子供ながらの独特なテンションを用いて彼女に話掛けた。どうしても知りたかったのだ、努力が出来る秘訣を。

そんなもの無いというのに……

「えっ……！　あの、その……練習……」

突然話しかけられたからだろうか、彼女は下を向き、ぼそぼそと蚊が鳴くような声で言った。人見知りするタイプなのだろうか、俺はあまり人見知りしないタイプだからそういうのはわからないけど、迷惑というより吃驚しているのだろう。憶測なのだが。一応、彼女とは同じクラスなのだが、一度も話したことがない。転校して馴染めないのだろう、彼女は誰とも話す事は無かった。だから気になったのだろうか、疑問は募るばかりだ。

「練習……もしかして運動会の？」

と俺が訊くと彼女は黙って頷いた。そういえばなんか凄い事になってたなとクラスの事を思い出す。彼女の徒競走のメンバーが決まった翌日、彼女以外の徒競走のメンバーが学校を欠席した。しばらく学校には来れないのだが、特に問題は無いと言っていた。だけど、それは嘘だと俺は思う。小学四年生に重傷だというのは酷だろう。こんな考えを持つ小学四年生がいるだろうか。実は俺はコナン君みたく黒ずくめの男に薬でも飲まされたのだろうか。そんな非現実に憧れてしまうのは小学生だからだ。だから俺もまだまだ子供だろう。一安心した。これで命を狙われているという選択肢は無くなった。自分の名前が変わっているから少し疑いもあったのだが、頭もよくないからすぐに消えてしまった可能性。話が大幅に脱線してしまった。これだから俺は変人呼ばわりされるのだ。話を戻そう。

「徒競走の練習って……」

「う、うん、その、ままだけ、ど……」

「おお！　努力マンみたいだ！」

「どっ、努力マンって……」

変なテンションで彼女を困らせてしまったようだ。いや、だってさ、皆の見てない所で努力するって少年漫画のキャラみたいで憧れるじゃん。陰で努力していてその修行で身につけたかめはめ波やら狼牙風風拳やらで悪役っぽいのをちぎっては投げちぎっては投げ、って話がまた大きくずれてしまった。話を戻さないと……

「性別的に努力ウーマン？　まあ、その話は置いといて……　えーっと、神原（かみはら）？」

「いや、神原(かんばる)って読むんだけど……」

「神原(かんばる)とな」

珍しい苗字だなーとか思いながら名前を思い出そうとする。全く浮かばない。うーむ……

「名前なんだっけ？」

単刀直入に訊いてみた。日本人なら誰しもが持ってる躊躇さと謙虚さは俺には無かった。

「……駿河、駿河湾の駿河」

「神原駿河……いい名前だなー、んじゃあ、駿河って呼ぶ事にするよ！」

「……う、うん！」

何処でテンションの上がる要素があったのかわからないけど何故か言葉を覚えた赤子のような達成感はあった。神って名前に入ってたらちょっと嬉しくない？　とか思っちゃう年頃なわけで、悪魔とかそんな伝説チックにときめいちゃうのは病気ではないだろう。

「楠元(くすもと)約士(やくし)くん……だ、よね？」

不安げそうに首を傾けながらそう問いかける駿河。相変わらず変な名前だと自分でも思う。約士ってなんだよ約士って、変わり種にも程があるだろう。もっとくーるな名前がよかったなといちゃもんを付ける。

「うん、友人と思ってた奴に裏切られた約士だよ」

ははははと自虐を混ぜこねて返答した。

「ああ……そうだったね。　あ、あれってやっぱり、あ、篤くんのせいなの？」

駿河はしどろもどろで俺の足元を見つめながら気まずそうに返答を求めた。駿河の言った篤とは友人の事の名前だ。

ちなみに何をしたかと言うと、友人が悪ふざけで窓ガラスを割ってしまったのだ。その後、終わりの会で誰が犯人か名乗り出ろと担任が怒鳴りながら言ったのだが、誰一人名乗り挙げる者はいなかった。ちなみに、証人はクラスの半分以上がそうだろう。唯、友人もクラスメイトも、担任の怒り狂った表情を見て、怯えてしまったのだろう。高学年とはいえども小学生だ。決して厳しく指導をしているとは言えない。寧ろ、余り表情が変わらない先生だったから余計、恐ろしく見えたのだろう。一部の生徒は半泣き状態。友人も深く反省しているようだし、ここは俺が肩代わりするか、と思い、立ち上がり、自分が割ったといかにも犯人のようなそぶりを見せた。　担任は共犯者はいないのか？　　と声を震わせながら俺に尋ねた。なら、ここで友人が反省するチャンスではないかと思い、目だけを友人の方に向けた。すると、「約士くんがやりました」と友人は声が裏返しながら言ったのだ。その事を聞き、担任は、約士が割った所を見た人は手を挙げろ、とクラスメイトに挙手を求め初めた。その時、犯人が俺一人に絞られてしまうと心底、ため息を吐いた。わかりきった事だ。どうせ皆は手を挙げるだろう。だって、犯人であった筈の人物が、犯人で無くなってしまったからだ。告げ口相手が新の犯人だなんて、正義感の塊のような人間しか言わないだろう。な

ら、目撃していない生徒はどうなのだ？　と考えてみると、これまた酷いものだ。この事件をどうでもいいと考える者と、恐怖政治の様に、手を挙げるという選択肢しか残されていない者だ。どちらも手を挙げ、満場一致で俺が犯人。俺のニックネームは馬鹿とか阿保みたいな酷くこざっぱりしたものになるだろうさ。友人の事は今日から藤木と呼ぼう。さくさく思考だけの時間が進んでいく。現実の時間はなかなか進まない。時計の音が響く程の静寂の中、映像をスロー再生しているのかと疑いたくなるようにゆっくりと、生徒達の手が挙がった。やはり、俺の考えた通り、全員が挙げたと思ったら少し誤差があった。

「約士くんは悪くないのに……ゴメンね、私がはっきり言わないから……」

駿河は申し訳なさそうにしょんぼりとしてしまった。

「駿河は悪くないだろ？　悪いのはあの馬鹿だ！」

ぷんすかという擬音語が似合いそうな程いらいらしながら回想に戻るのだった。

俺のいった誤差とはてっきりクラスメイトを自己主張しない生き物とばかり思っていたのだが、どうやら違っていたらしい。ネガティブ思考も程々にしておこう。はっぴーな考えを用いて生きよう。どうせ人生はバラ色なんだから。

ネガティブかポジティブかわからない思考は置いといて、馬鹿野郎の話の続きでもしようじゃないか。誤差というのは全員という一括りが間違っていたというものだった。一人だけ手を挙げていなかったのだ。それが彼女、神原駿河だった。　それに気づいた先生が

何か言おうと口を開いた。のだが、そこで友人(ばか)がしゃしゃり出てきた。馬鹿(あつし)は「神原さんはその場にいませんでした」、と嘘の告げ口を言い始めた。ちなみに、俺はその現場を目撃しておらず、別の友人とグラウンドで遊んでいたのだ。だから生徒の殆どは何言ってるんだこいつ、と思っていただろう。友人の株は下がるばかり、ざまーみろ。回避するのに必死だから未来で嫌われるのさ、と心の中で嘲笑っていた俺。　結局、担任も俺個人の仕業だと確信し、放課後まで怒られたのだ。遊ぶ約束も丸つぶれ。まぁ、人生、こういう経験しておいた方がいいだろうと、頭の中をお花畑にして考えていた。

「まあ、そんな事どーでもいいや。それよりも駿河、徒競走の練習しようよ。俺も運動神経ないし」

「駄目！！」

「ぬっ……！？」

今までぼそりとしか言わなかった駿河がハッキリ断言したのに驚いてしまった。表情は少し怒りの混じった顔をしているのだが、何かに怯えているように見えた。少し不思議に思ったが、あまりそういうのは聞いちゃいけないなと思い、提案をしてみた。

「じゃあ、俺がこーちな」

俺は大体、そこから二十メートル程離れた所に立ち、少し声を張り上げて、

「ここまで全力ダッシュだ！」

と叫んだ。　駿河は展開が速すぎて付いていけないようで、頭にクエスチョンマークが交差しているのが見える。なんか、こーちって言ったら鬼みたいにびしびしと叱り付けるイメージがあったので、少し、熱いキャラを装ってみたのだが、変だったのだろうか。まあ、変だろうな。変人でもランキング入りするレベルだろうさ。でも、変だからこそ変にしかわからない変のような変……もういいや。

「どっ……どういう事ーー！」

駿河は声が通るようにか、手を山彦の時のように合わせ、俺の方へ叫んだ。

「本で例えると俺がメロスの友人の何とか」

少し前に読んだ本の人物をもやもやと浮かばせて言った。

「それってセリヌンティウスーー？」

「そうそれ、そのセリヌン何とか。それで駿河はメロスだな」

セリ……何とかの台詞って何だっけ？　と、人質役の台詞を捜し出すのだが、最後の信じていた的な感動シーンの台詞しか浮かばない。なんてこった。ケニーは死んでないけどね。サウスパークも数話しか見てないや。子供には刺激が強すぎたからね。それで……えーっと、ああ、台詞か。うーむ……

「早く来ないと殺されちゃうよ！！」

「そんなキャラだったの！？」

ぬっ、なよなよしたキャラになってしまった。けど、まあ、いいか。

「兎に角、此処まで全力で走って来い！」

それっぽく出来たのに少し喜びを感じたが、表情に出たら台なしになってしまうのでデータを消去、完成、無表情。

俺が表情と戦ってる間に駿河は覚悟を決めたような顔で構え、俺の方へと走り出した。　お世話にも速いとは言えない速度なのだが、その光景はマラソン大会のラストシーンに匹敵する何かがあった。

……頑張れとは言わない。だって頑張ってるじゃないか頑張っている人に頑張れだなんて台詞はいらないだろう。それよりも別の台詞があるだろう。

駿河は二十メートル走り切った。全力で走ったらしく、肩で呼吸しているようだ。俺は声を掛ける。

「頑張ったな」

過去を振り返るように、尊敬するように、俺は言った。

「……うん！」

駿河は嬉しそうに頷くのだった。

◆◇◆◇◆◇◆

その後、こーちっぽく良い点と悪い点を見つけ出し、報告した。踏み込みはいいけど腕の振りようが駄目とかそんなのだけど。それでも真剣に聞いてるようで、こくりこくり、と黙って頷いていた。

そして、気づけば辺りは一面闇で覆われていた。さっきまであった夕日の原型なんてなく、少し濁った光が差し込んでいた。子供故に夜が来るのは遊戯の終了時刻のようなもので、余り好きでは無かった。駿河も疲れているようだし、帰宅する事になった。俺には門限なんか無かったので、駿河を送ってから、寄り道して、寄り道して、遊……寄り道してから帰ろうかなと脳内計画。まだまだ遊び足りないのだ。こんなハイテンションで家に閉じ込もれるかって話。小鉄っちゃんぐらいのハイテンションなのだ。

「……まさかお隣さんとは」

予想外の展開で俺の寄り道計画は音を立てて崩れていった。……まあ、いいや、生きてるし、と無理やりな考えで悔しい気持ちを殺した。上手いこと言いたかったけど浮かばなかった。これも全部夜のせいだ。夜になると思考回路に制限が掛かって何もかも想像出来なくなるに違いない。なので夜は嫌い。

「じゃあ、私ここだから……」

何故か駆け足で家に向かう駿河、こういう時さよならとかバイバイとかじゃ駄目だよね。

「また明日ー！」

明日も遊ぼうという意味が含まれてます。俺がそう言うと、駿河は立ち止まって、ぺこりと頭だけ動かし、そそくさとドアを開けて、家に入った。　うーん、駿河は俺をどう思ったのだろうか。変人？　隣人？　友人？　最後なら結構嬉しい。まあ、変人が妥当か。隣人で変人。何とも言えない結論で終わった。

さてと、家に帰って子供らしい遊びでもするか、と子供らしくない事を考えながらドアを開けた。

「ただいまー」

「おかえりー、じゃあ、何か甘い物買って来てねー、よろしくー」

「ただいまって言ったんだぞこら！」

日本語が通じてるのかさえ危うい発言にびっくりする俺。姿も見せずにパシらせようとするとは……　ああ、一応説明。いとこ、雌、面倒。何故いとこがいるのかは俺の両親の都合なのだ。母は会社のお偉いさんで、滅多に家に帰らないし、父は海外で単身赴任中。なんて働き者の家族なのだろうか。そんな忙しい家族は当然、子供の面倒なんて出来る訳なく、誰かの家に引き取って貰わなければならないわけで、俺は経験値稼ぎの為に一人暮らしを要求したのだが、一人じゃ心配だからとかで高校生のコイツが付いてきたのだ。　まあ、俺が中学生になったらコイツも元の家に戻るそうだし、妥協してしまったのである。

「早くー」

「冷蔵庫にチーズケーキあるから食ってろ！」

俺が自分用に作ったやつだけど……

はあ、とため息を吐いた。……忘れよう。そんな人間いなかった。それよりもご飯だ。靴を脱ぎ、台所へ向かう。

「……無駄に美味い」

いとこの料理はムカつく程美味かった。いつもぼーっとしていて、何をしてもスローモーションなのに料理だけはテキパキとせせこましく動く図は今でも信じられないものだ。あの料理スキルは身につけたい。まだデザートのジャンルしか作れない俺の苦難はまだまだ続きそうだ。

そんなこんなで俺の一日も終わりを告げる。

今日も楽しかったな。

◆◇◆◇◆◇◆

『ま……か……近づいて……』

夢だ。また変な夢だ。夢の中の内容なんて酷く適当だ。いつも変な女が途切れ途切れの言葉を呟くだけ、相変わらず気味が悪い。どうせ同じ事の繰り返しだろうし、無視しよう。さよなら夢さん。君の話には通訳がいりそうだ。

◆◇◆◇◆◇◆

それから何週間も練習した駿河はおそらく、クラス……いや、学年で一番速くなった。最初の頃とは比べものにならない程速い。マッハGOGOGOも驚くレベル。高速のランニングバックと言えよう。

そんな小学生とは段違いの速さで、徒競走ではぶっちぎりの一位だった。今まで、地味だった神原駿河はその出来事の後、有名人になった。学年、学校中、誰一人知らない人はいないくらいの有名人

に。

もう、俺には届かない次元の人となったのだ。一方、俺は問題児。成績とかではなく、態度がどうとか。だってねえ、色んな人の肩代わりしてるからね。そりゃ悪いだろうさ。皆、俺が肩代わりするから容赦なく悪戯するし、全く、『俺がいなくなったらどうなるのだろうか』　さぞかし優等生だろうな。

未来からの俺は今の俺をヒネくれてきたなと思ってるだろう。慣れというものは恐ろしいのだ。何人の人生を壊したのだろうか。……まあ、どうでもいいや。そんなの有り得ないだろうし、俺も怒られて何も思わないし、どうでもいい話なのだ。

問題児たる俺が駿河に関わらない方がいい。悪友達とつるんでダラダラ生きてくよ。それが楽しいんだから。落ちぶれていく様は美しいんだよ。とか何とか語ってるんだけどさ。どうせそんな上手くいくわけないよ。俺の考えだから。

◆◇◆◇◆◇◆

中学生になった。あれから俺の計画は成功したのか？　と聞かれれば大失敗だ！　と叫びたい。隣人だったからなどではなく、根本的なものが大幅に違っていた。そりゃあ、駿河の性格が変わるなどと思うまい。人間って変わるんだなー、と人間の進化を目にしたようだった。

そんな事を考えながら時計を見た。現在、六時五分。電車通学で無い限り、早い時間だと思う。この時間なら大丈夫だろう。俺は引っ掛けて置いた制服に着替え、無造作に置かれてあったウォークマンを手に取り、イヤフォンを耳に当てる。曲なんてボーカルがいな

いものしかない。歌詞が嫌いなのだ。

別に曲が好きなわけでもない。兎に角、何かに縋りたいのだ。少し現実から目を背けたいとかその程度。休み時間に好きでもないのに読書するのと同じだ。無理やりにでも自分だけの空間というものを作るのだ。まあ、例外もいるのだけど……

期待と不安で心臓が張り裂けそうになる。いやな予感はゴミ箱に捨てて、ドアを開けた。

「おお！　約士！　元気だったか？」

見計らったかのようなタイミングで家の前に現れた駿河。俺の聞いてた音楽が聞こえなくなる程の声量、爽やかな笑顔を見せてサムズアップ。朝から元気だなー、と思いながら、一時停止ボタンを押し、イヤフォンを外す。

「昨日も同じ事言ってたぞ」

ぶすっ、とした顔で睨みつけるのだが、駿河は、ははは と笑い、そうだったなと言い、俺の背中をどんどんと叩いた。はっきり言うと俺よりも筋肉が付いてるので凄く痛い。でも、我慢できない程でもないので無理やり我慢。ストレス溜めまくり死ぬんじゃないか？　なわけないだろうけど。

こんな感じの関係になってしまった。一応、親友である。　お互いに。

慣れノハテ

愚か者が考える計画程、あてにならないものはない。愚か者の俺が言うのだ。確証はある。今まで幾つもの計画が破裂し、無くなってしまったかわからない。その大よそ殆どは神原駿河と言う、人気者のせいなのだが、まあ、どうでもいいや。　明るくいこうじゃないか。早起きは三文の徳だってことわざのように……今日、起きたの四時なんだけど……　もっと奮発してほしいな。二三文ぐらい。

「うん？　どうして私を避けるのだ。あれか？　嫉妬か？」

「朝からハイテンションはきついんだよ」

情報力がオーバーしてヒートしそうだ。主に脳がやばい。基本的に朝はテンションを控えておかないと後で死んじゃうもん。将太の寿司見たいし。もう、横文字じゃないと頭に入らない。日本語なんて横流しだ。

「でもさー、駿河も変わったよなー。　昔は大人しい奴だなとか思ってたら騒がしい奴になったし」

「それを言うなら約士も変わっただろう？　昔は結構、子供らしく燥いでたけど、今では見る影もない———」「ひでえ！」

朝から人が気にしてる事をきっぱり言う駿河、ヒネくれたと思うけどさ、思うけどさ……　まあ、いいや。気にしたら気にしただけ疲れるのだ。あまり、触れない。

「いやいや、悪い意味ではなく、良い意味でだぞ？」

フォローのつもりで言ったのだろうが、良い意味で使う言葉じゃないだろ。　……フォロー？　フォローフォロー……　あっ……

「昨日ってさ、役員会議あったっけ？」

「ん？　図書委員だけあったな」

「あっ……」

「……そうか、私でも止められないからな。気をつけろよ」

面倒事は嫌でも舞い込んでくるのかとため息を吐いた。

◆◇◆◇◆◇◆

「何十回も言ったのに何サボってんだお前は！　絶対来いっつたよな？」

朝早くから来てらっしゃた図書委員の人……ヤクザか何かの間違いじゃないかと疑いたくなるレベルの言葉遣いだ。ちなみに霊長類の雌でタニカワと言う生物で頻繁に怒る調べたくもない生物だ。

「何か言ったらどうだ？」

「孤独のグルメ見逃した」

「お前の頭には何が詰まってんだよ！！」

「思いやりとか」

「……！」

人間と同じ様に拳を作り、ぷるぷると震える谷川。

「武者震い？」

俺が尋ねると、拳を前に突き出してきた。条件反射でかわす。危ないなぁ、訓練された人間でなければ避けられない速度だったぞ。谷川の突き出した拳は空を切り、空振りに終わった。

「避けるな！」　などと申しており、犯行を認めたようです。

「流石にそれを喰らったら死んじゃうよ」

強ち、嘘でもない。駿河と同じバスケ部所属である谷川のグーパンチは帰宅部の俺をノックアウト出来るだろう。コイツ筋肉やばいし。スグルだし。

「今までの分、キッチリ――――」「きっちり？」「あっ……」

谷川とグダグダしている間にも時間は進んでいたのだ、漫画じゃないしね。生徒たちも殆ど登校してた訳で、先生も教室にいたとか日常的な話だった。

「い、いや……あの、その」「すみません。自分のせいです」「えっ？」

躊躇なく頭を下げる俺、先生はまたか、と頭を掻く。生徒たちも

また約士が仕出かしたのかと考えてるような顔で俺を見つめる。駿河は何とも言えないような顔でため息を吐いている。　谷川は何が何だかわからないようだ。

「今度は何したんだ？　約士」

先生は呆れた様子で俺に問う。

「図書委員を業とさぼり、挙句の果てには優等生に逆ギレしました」

『すみませんでした』深々と頭を下げた。これで株も底辺中の底辺かな？　どうでもいいけど。

「……わかった。後で生徒指導室に来いよ」

先生はポンポンと俺の頭を日誌で叩き、今までの事は無かったかのような対応でホームルームを始めた。うん、呆られてきたのは俺の日ごろの行いからだろう。全部面白い方向に進んでいていいね。どうなるのだろうか。俺がいなくなると。

◆◇◆◇◆◇◆

そういえば昔に篤と言う友人がいたことを思い出した。彼は今、どうしているのだろうか。あれからグレにグレて茶色に染めた髪が痛々しかったっけな。グレ始めましたみたいな必死がひしひしと伝わってきたよ。仕舞の果てには煙草まで吸って、落ちぶれてたなー。まあ、煙草の件は流石に庇いきれなかったな。吸ってるか吸ってないかぐらいは見抜かれるだろうし、あの時、どうして……どうして……　と泣き叫んでいたのは今でも忘れない。庇ってくれなかったとは言わなかったな。プライドってやつか。　かっこよかったよ友

人。

イヤフォンから流れる音楽が友人の好きな曲に似ていたので思い出した過去の記憶。今となっては良き過去、若かった自分、ヒネくれてないのが信じられない自分。　歳は取りたくないなと悟る十代。

そんな十代は現在、帰宅中。先生が呆れていたのもあるが、説教が短かった。運が良いのか悪いのかわからないなとか考えてたけど実際は運が良いの部類に入るんだろうな。自分の考えでは少し違うけれど。

現在の事なんか考えない。基本、未来主義だ。だって未来は明るいんだもん。

相変わらずの楽天的な考えだった。オチがついた所でイヤフォンから音がしなくなった。あれ？　リピートモードにしてなかったっけ？　と思い、ポケットからウォークマンを取り出し、画面を覗き込む。

【充電してください】　畜生……　充電してなかった……

兎に角、何か耳に当てたいと思い、簡易型充電器が売ってそうな所を探す。おっ！　ちょうどいい所にコンビニが……　と思った矢先、コンビニの前には不良的な服装のあんちゃんが大きな荷物を持った女の人を睨み付けているではないか。使い古された展開も田舎ではまだセーフなのかとフィクション脳を用いて対処法を考える。まあ、話を聞いてみよう。実は園長先生かもしれないじゃないか。

「ちょっと待ってくれよ。　小銭ぐらいあんだろ？」

「……え、あ……ありま、せん」

「そんなに荷物あるんだから少しはあるんじゃねーの？」

「や、やめて……くだ、さい」

園長先生じゃなさそうな人は女の人の荷物をぐいっ、と掴み、中を確認しようとする。俺の不良の定義と一致した。田舎もんの不良らしさが滲み出ている為、見た目ではうやむやにしたというのに。

俺は女の人の元へ向かった。軽く気まぐれである。

「ああ、此処に居たんですか。皆、心配してますよ。さあ、行きましょう」

大根役者が鼻で笑いそうな演技で女の人の手を掴んだ。女の人は最初は何吐かしてんだコイツ、みたいな表情だったが、直ぐ策に気付き、大袈裟に頷き、いそいそと俺の背後に隠れた。

「何だお前、この女とどんな関係だ？」

強気な態度で俺を睨み付けるチンピラ。その目は自分を過大評価している目で、怖がらせようと必死なのがわかる。

「先輩と後輩です」

俺はいかにも真実を語っているかのような態度できっぱりと言った。たいてい、自分を過大評価している人は、言葉よりも態度を重視している場合が多い。要するに容姿を重視する人物なのだ。

「何のだ？」

「演劇部のです」

「演劇部う？」

「はい、演劇部です。その荷物は劇で使う物でして……」

「じゃあ、どうしてこの女はこんな所にいるんだよ」

「先輩は人見知り故に演劇が厭になったそうで……天分の才をお持ちなのに変わったお方です」

「……わかった」

一応、言っておくがアドリブだ。大体何を言われるかは見当が付いてたからよかったけど質問の多い事多い事……　まあ、おそらくこれで納得しただろうし、後は女の人への謝罪で終了。恩だけでも売っておこう。どうでもいいけどね。まずはこの場を去らないと……

「では、この辺で――――」「待て」「……何でしょう」

逃げ出そうとしたのだが、止められてしまった。頭を使い、考えたらしく、その声は一段と低いものだった。

「その荷物を見せろ」

「ですから、これは舞台道具でして」「いいから見せろ」「……」

面倒な事になりそうだ。俺は頭をかき、したり顔のチンピラの話を聞く事にした。

「やっぱりそうだ！　お前ら赤の他人なんだろ？　お前の対応力に圧倒されて騙され掛けたが、考えてみりゃあその女、一言も喋ってねえじゃねえか。つまり、全部出鱈目。その大事そうに抱えてる荷物はさぞかし高価なんだろうな」

チンピラはニヤリと屑みたいな笑みを浮かべた。うーむ、この男、少しばかり頭が切れるようだ。さて、どうするかな。期待していたコンビニの店員も関わりたくないのか見て見ぬ振りだし、人気も無い。

「お前も俺の邪魔したんだ。それ相当の謝礼しろよ？　……ん？　その女、ずっと下向いててわからなかったが美人じゃねえか。……お前にいい話がある。『その女をこっちに寄越せ』、そしたら許してやるよ」

へへへと下種な笑い声を上げた。典型的な屑だった。俺もこんな図々しい屑になりたいものだと素直に思った。だって長生きしそうじゃないか、とストレスのみの考えだった。　俺は男に近付き――――！？

……痛い。身体が張り裂けそうな程痛い。けれど身体の節々からの痛みでは無かった。

『心の痛みだった』

自分でも意味がわからないのだが、脳がそう判断したのだ。どの部位にあるのか知らない心は、死を叫んでいるかのように暴れ、俺を傷つけたのだ。何て事だ。当の昔にくたばったと思っていた心

は、俺を殺すのかと、朦朧とした意識の中、必死に心について考えていた。

そして意識を――――失わなった。

痛みは引き、死に掛けていた自分が嘘のようだった。何だったんだ今のは。糖分を摂取し過ぎると心が痛むのかと、責任を押し付け、今すべき事を考えた。

そういえばチンピラがいたっけ？　痛みと共に聴覚も視覚も働かなくなったから気が付かなかったな。溢れ出た汗を拭い、目に力をいれた。

『男が横たわっていた』

はあ？

状況が飲み込めなかった。

後ろを振り向く、女の人は、ぽかんと口を開け、固まっていた。

わけわからん……

◆◇◆◇◆◇◆

「では、さようなら」

俺は手を振り、女の人は赤べこみたいに顔を赤くして、赤べこみたいに首を振り、恥ずかしそうに去って行った。

話を整理しようか、女の人いわく、俺が男に近づいたと思ったら、立ち止まった。まあ、心に激痛が走った所だろう。その様子をチンピラが面白がって俺に近づいたらしい。　女の人はつい、目を隠してしまったそうだ。だけど聞こえてきたのはチンピラの声だった。そして、目を開けるとチンピラが横たわっており、俺が唖然とした顔で突っ立っていた。　想像するだけでシュールな光景が目に浮かぶ。誰のスタンドだよそんな事したの。

実は俺は特別な存在だったとか？　ヴェルタースオリジナルみたいに。　そんなわけないな。選ばれてるのならもっとまともな人間で、人にへこへこと媚びでも売ってる人間に成れたのだろうか。成れるわけないだろうよ。どうせ俺なんだし。

色々あったけど兎に角、終わったのだ。終わった事を愚痴るのは正義の味方の仕事だろう。俺のする事じゃない。覆面付けた変な人がどうにかするだろうさ。こんな他人主義で事なかれ主義の考えでいいのだろうか。わかんないな、他人にでも決めて貰おう。

自分の思考回路が正常である事を確認し、音の鳴らないイヤフォンを耳に当て、自宅へと覚束ない足で向かう。あの痛みのせいで疲れが身体に襲い掛かったみたいだ。全身に重りを付けられた感覚が酷く不気味だ。いつ死んでもおかしくないような違和感がする。死ぬ時は血飛沫でもあげて不様に死にたいな。

物騒な想像は置いておこう。長く感じた道のりを越え、やっと家に着いた。　鍵穴に鍵を差し込み、右に回――――開いてる？　確か、鍵は占めたはずなんだけど……

これは……強盗？　まさかそんな筈はと思い、家に入る。　……犯人がわかった。

だって、女子の靴が散乱してるんだもん。犯人はアイツしかいない。　俺はそう確信して、リビングへと向かった。　———俺の予想は的中していた。

「おい、不法侵入者。　何勝手に人様の家で宴会始めちゃってるんだよ」

犯人は駿河だった。

◆◇◆◇◆◇◆

隣人が自分の家で部活仲間達を呼んで騒いでいた場合、どう対処すればいいのだろうか。追い出すような事は流石にしないが、少し強盗じゃないのか？　という不安の心を返せ。最近の強盗の素性などを見てみたかったのに、そんなものこれぽっちも無かった。

「あれ？　言ってなかったか？」

「言ってない」

絶対言ってない。そんなお前何言ってるんだよみたいな顔すんな。絶対言ってないだろお前。

「確かケーキ作って置いてくれとは言った筈なんだが」

「まあ、作ったけど……　それがどうこれに繋がるんだ？」

確かにケーキは作った。昔からの趣味だし、暇だったから作ったんだよな。ホールケーキ。

「それはこの時用でな。私の部屋でやるつもりだったんだが……生憎な……」

それ以上は察しってくれというような目で見つめてくる駿河。まあ、魔物でも眠ってそうな部屋だしな。時々。俺も片づけたりするんだけど、中々片付かない魔窟と表現しても可笑しくない部屋だろう。

……それで俺の家を使ったのか？　どうやって入ったかはどうせ、いとこの残した予備の鍵でも頂戴したのだろう。うーむ、それよりも駿河以外の人達は気まずそうな顔をしてるんだけど、やっぱ気まずいよね。一人だけ違う顔をしてるけどね。

「谷川、お前なんで俺が悪いみたいに睨み付けるんだよ」

鳥をも落としかねない物騒な目をしていた霊長類がいたので注意する。　より一層、目つきが悪くなる谷川。なんだこいつ。

「グダグダ言わずにさっさとどっか行けよ！」

相変わらずの凶暴さに反吐が出る。こいつの男子を否定する態度が少々目に付く。こんな性格の奴に限って社会で活躍するんだろうな。

「……俺が悪かったよ。だから最後にグダグダ言わせてよ」

「何だ？」

何様だよこいつ。宿主みたいな対応にかちんとくるが、もう意識しない。

「駿河、冷蔵庫にショートケーキ入ってるから食べちゃってよ。後、よかったらチョコレートケーキも食べていいよ」

本当は俺用に作ったんだけど人数的に足りなさそうだ。　シュークリームも作って置いたからそっちを食べればいいしね。

「すまんな！　ありがとう約士！」

ハイテンション駿河さんからのお礼を聞き、へいへいと素っ気無い返事で返してから自分の部屋に籠った。

◆◇◆◇◆◇◆

部屋に籠ったけど晩御飯を食べてない事に気づいた自分。お腹が何も入って来ないぞ！　と言わんばかりに叫んでいる。我慢してくれと食事の事は忘れ、食欲に反抗する。そんな食事について考えてる暇なんて無いんだ。　アニメでも見よう。

俺は借りてきたＤＶＤのタイトルを確認した。　まあ、ここはコジコジかな？　と謎チョイスでディスクをＤＶＤレコーダーに入れ、再生ボタンを押す。

雪だるまの名前がコロ助だったからあっちのコロ助と間違えたっけなと子供の頃を思い出す。　でもこの雪だるま、ど変態なんだよな。これ以上ないくらいに。　でもこれを超えそうな人に会える気がするのだが、気の間違いだろう。

ファンタジーに浸り、お腹が大変な事になりそうなので、台所へ。

流石に台所なら迷惑も掛からないだろうし。

◆◇◆◇◆◇◆

晩御飯はチャーハンになりました。すぐ出来るし、簡単だしね。デザートまであるんです。何てったってシュークリーム。皮を作るのはまだ苦戦するけど頑張ったんです。　そんな感じの晩御飯。

駿河達は何だか賑やかになってきた。うーむ、宿主なんてすっかり忘れているようだ。　もう、面倒だし、疲れたし、寝ようかな。

スタンド騒動のせいで少しふらふらする。熱っぽくは無いけれど起きてからシャワー浴びよう。今はそんな気分じゃないのだ。　自分の部屋に着き、一目散にベットに飛び込んだ。　と同時に眠気が襲い、眠りについた。

◆◇◆◇◆◇◆

『やっと眠りについたか、おっそいな』

恐らく夢である真っ黒な空間には、病気みたいな白い髪をした女の人が突っ立っていた。

……あれ？　いつもの面白味の欠ける夢ではなく、少し変わった夢と変貌していた。　今までシルエットだけで判断していたのだが、現実らしい姿になった女がいた。　それに言葉がハッキリと聞こえる。

女の恰好は死に装束を纏った全身白でコーディネートされており、日に当たった事なんてなさそうな色の肌がより一層白さを強調していた。　まるで『死人みたいだ』

『当たってるちゃあ、当たってるけど今は違うと言っておこう。私は君の×××さ。　だけど相性が悪かったみたいで怪異になっちゃったんだよ。　まあ、そんな事よりも言いたい事があるんだ』

ニヤニヤと馬鹿にしたような笑みだと思ったら、突然、真剣な顔で俺に近づき、

『その性格、変えなよ』

アドバイスのように忠告するのだった。　俺は突然の事ではぁ……　と無難な返事しか出来なかった。　心の中ではそんな簡単に変えられるかよと意識していなかった。

『変えないとこの辺りの人間が狂ってしまうからね』

君は無視してるだけだろう、と意味有り気な台詞を最後に意識は現実にへと戻っていった。

◆◇◆◇◆◇◆

目が覚めた。　頭が働かないまま携帯を覗き込んだ。　時刻は午前三時二十分。朝とも夜とも言いにくい時間帯だった。　取り敢えずシャワーを浴びたい。あの夢のせいで汗を掻いてしまったようだ。フラフラと死人のように足を動かす。　すると何か、紙のようなものが足に当たった。

何だろうと思い、拾い上げるとそこには、

【今日はありがとう　　駿河】

と書いてあった。

少し許せなかった気持ちも、まあ、いっかと思えてしまうのは彼女のカリスマ性だろう。唯の腐れ縁だとか思っていたけど案外、相性がいいのかもしれないと、上手く動かない脳は判断した。

少なくとも腐った友人よりも、と付け足したのは照れ隠し。

慣れノハテ（後書き）

どうして自分の書いた小説の主人公はこう、何とも言えないような性格なのだろうかと思いました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7624z/

丑物語

2011年12月27日19時46分発行